「森三郎の作品を読む会」通信　第20号

2014年2月14日　発行

森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

二〇一四年一月の「森三郎の作品を読む会」では、
「むじなの仇討」（『赤い鳥』昭和7年9月号初出）
「狐」（『赤い鳥』昭和7年10月号初出・
森三郎童話選集「かささぎ物語」所収）
「最上徳内」（『赤い鳥』昭和7年10月号初出）を読みました。

「むじなの仇討」は、動物が尾で魚を釣ろうとして氷に閉じられしっぽを失う昔話「しっぽのつり」と、大名行列に化けるといって、本物の大名行列で相手を負かす「化けくらべ」の二つの話を題材とした作品である。昔話では、カワウソと狐、カワウソと猿の話であったりするが、森三郎の「むじなの仇討」は、前半は「むじな」が「狸」にだまされ、しっぽが切れてしまう話で、後半はその仇討をするという話になっている。むじながしっぽを氷に閉じられ泣いているところに、村の子どもたちを登場させ、二つの昔話をうまく融合させている。動物譚に終わらせないようにする工夫が感じられた。

「最上徳内」は江戸時代、前人未到の地であった「奥蝦夷地をはじめて探検して、学術的な調査をしたのが最上徳内です。」と、その生涯を紹介した「実伝」作品である。「最上徳内」については、兄・森銑三の書いた「最上徳内」が『森銑三著作集』第五巻に載っている。その「編集後記」によれば、初出は、昭和五年八月号から昭和六年三月号までの六号にわたり、雑誌『歴史地理』に「最上徳内事蹟考」の題名で連載した作品であるという。森三郎の「最上徳内」が『赤い鳥』に掲載されたのが昭和七年十月号だから、兄のこの論考が参考になったことは明らかだ。

これまで「森三郎の作品を読む会」で読んできた、幕末の人物の（実話）「坂本龍馬」「ジョセフ・ヒコゾー」に関しても、兄弟の語らいの場を想像できる。

「森三郎の作品を読む会」では、復刻版『赤い鳥』をテキストにしているが、その際に各号の表紙や目次にも目を通している。

今回、昭和7年10月号の目次に、「うさぎ（佳作）・・・豊田正子」という項がある事に気づいた。後に『綴方教室』として出版された中にも出てくる作品である。（1937年（昭和12年）、中央公論社）。本文には名前の横に「東京府南葛飾郡本多小学校尋四」と記されている。「一軒おいたおとなりの、おりえちゃんの家」から「うさぎ」をもらった時の様子を描いた作文である。この号には「特選」はなかったが、「佳作」に選ばれた「うさぎ」について、鈴木三重吉は

豊田正子さんの「うさぎ」は、四年生としては叙写が外廓的で、陰影が足りませんが、ともかく、すら〳〵と渋滞なくかけてをり、終始うぶ〳〵した純感さにほゝゑませる、かはいらしい作篇です。

と、評価している。特に対話が生き生きと実感的であること、描写が細かいことなどを褒めている。

このころ、森三郎は「赤い鳥社」の編集者でもあったのだから、この綴方の原稿も実際に目にしていたのだなと、『赤い鳥』編集の現場が実感できる。

かつて、森三郎が亀城小学校の2年生だった時、同校の代用教員をしていた兄・銑三が、受け持ちクラスの子供たちの作文を投稿していたことを考えると、時の移ろいが感じられる。

◎ 次回予定　3月14日（金）午後1時～3時
「雁」（『赤い鳥』昭和7年10月号初出）
「榎の僧正」（『赤い鳥』昭和7年11月号初出
「森三郎童話選集　夜長物語」所収）
「桐壷宰相」（『赤い鳥』昭和7年11月号初出）

◎ 予告　第2回「森三郎に親しむ集い」
5月25日（日）午後